

# (財)住宅リフォーム・紛争処理支援センター理事長賞

## 講評:

大都市圏の郊外に建つ、築後21年を経た大規模集合住宅の中の一住戸である。その住戸の内装を木造化したリフォームである。

これには特筆すべき点が2つある。1つは内装に自然素材、特に「ムクの木材」を積極的に取り入れるように工夫したこと。もう1つは、木材を使うことによって生ずる様々な問題点を、自己の開発した技術的手法によって解決し施主の満足を得たことである。

通常、マンション住戸の壁や天井の大部分に可燃材料を使うことは、消防法の特例や消防設備の設置緩和条項などとの関連があるため、入居者の強い要望があっても敬遠されることが多い。また床を木材で張る場合には防音の問題がある。

設計者は、マンションリフォームの最大の課題は床防音と捉え、根太組と遮音シート、共鳴現象を防ぐグラスウールを組合せる独自のムク材の使用工法を用いた。

建具も、合板を芯に使う独自の製作法により、廉価でムク材の肌合いを持たせることに成功している。この製作法では、床から天井まで一枚の大判扉もできる上、現場寸法に応じて簡単に調整・切断が可能なので、マンション住戸にありがちな梁や柱の無骨さをさり気なく隠すのにも有効である。建具のはめ込み方や引き勝手などディテールも細やかで使いやすく工夫されており、マンション住戸のリフォーム向き技術として完成度が高い。

壁は珪藻土系の左官材、天井は自然素材クロスを用いて内装全体で吸放湿を調整することが意図されている。加えて、掃出し窓側の暖気を新たに設けた内障子によって囲い込み、パイプで収納部分（内装も桐材）の床下に回してカビの発生と孢子の放散を抑えるなど、空気環境に対する配慮も積極的である。

以上に述べたように設計者の考慮した新しい工夫が随所に見られるが、デザイン的には全体の統一性に改良の余地があるなど解決すべき課題も残されている。

しかし、制約の多いマンションのリフォームに大胆に木材を取り入れ、応募題名を「木の家」とした意欲と努力は高く評価してよいであろう。今後、シックハウス問題へのさらなる意識向上も踏まえれば、ムクの木質系内装への志向は社会全体で確実に高まるであろう。

以上の理由により（財）住宅リフォーム・紛争処理支援センター理事長賞に推薦した。



